

○わたしの愛唱歌シリーズ 全9集 1997-99

私は、音痴ですが、音楽を聞くのは、個人でも、寂しい気持ちを和らげてくれるためか、好きです。私も、色々な国の切手を、長年、見てきましたが、切手内に、楽譜が載っているのは、本当に珍しい切手だと思います。1979-1981年に発行された日本の歌シリーズ（全9集）がまず、最初でしたが、それらは、主に文部省唱歌、小学校の音楽で習う歌が主だったと思います。それは、文明開化とか富国強兵の国の方針の為に、国を歌でまとめて、国力の向上を得ようとしたもので、女性には選挙権もなく、教育の一環だったと思います。従いまして、戦前に作られた歌で国の風格、文化性を国民の中に植え付けようとした気配がします。まさに「日本国とは何ぞや？」を上から、押しつけているようにも、また、お達ししているようにも聞こえます。別段、嫌いではないですが、日本の有様、風情等を、幼い頃から、耳で聞いて、覚えさせようとしていたことが分かります。所謂、古典音楽です。

それに比較して、このシリーズでは、戦後の民主主義を肌で感じます。私達個人の人生への思い、考えを、後押し、応援している歌も、あります。そうです、「いい日旅たち」、「上を向いて歩こう」、「四季の歌」、「北国の春」等ポピュラーソングにそれを感じます。また、「おもちゃのチャチャチャ」、「この道」、「野ばら」等では、民主主義の学校の音楽で習う歌が取り扱われており、戦前・戦後の違いが、古典主義と民主主義の違いからもうかがえることでしょうか。あまり、恋愛じみた曲はないが、戦後はつい、経済発展が商売繁盛の精神で優先されて、影を潜めたのでしょうか。

「歌は世につれ、世は歌につれ」と玉置アナが言っていたが、まさにその通りだと思います。また、今後も日本の歌関連切手を、楽譜を載せて、国に世界に紹介・発信してもらいたいものと思いますが、今では、世代間の違いもあり、ゆとりもでき、恋愛曲も流行り、J-ポップ、ロックとか演歌の路線の違いも鮮明となり、全員が満足する音楽切手集は、発行に苦労するみたいですね。

# 日 本

## わたしの愛唱歌シリーズ(つづき)

グラフィック、目打：柳原13

第3集 1998. 1. 26.



第4集 1998. 3. 23.



第4集 1998. 3. 16.



第5集 1998. 5. 25.



第6集 1998. 7. 6.



第7集 1998. 11. 24.



第8集 1999. 1. 26.



第9集 1999. 3. 16.

